

## 《創立 50 周年記念によせて》

日本微生物資源学会 50 周年記念  
～50 年間の歩みと私が学んだもの～

日下 大器

## 1. はじめに

日本微生物資源学会 50 周年記念大会、おめでとうございます。

当会がかつて、日本微生物株保存連盟という名称でした。だんだん大きくなったので出世魚のように 1993 年に日本微生物資源学会と名称が改められました。そして本年 2001 年、50 周年記念大会を迎えることになりました。振り返ってみると私は当会に関係して、大きなものを学びとることができ、たいへんうれしく思っています。50 周年記念に際して「温故知新」、この 50 年間の先人の努力と私が何をどのようにして学んだかを回顧してみたいと思います。

## 2. 50 年間の歩み

およそ、活動しようとする人は最初は個人で行動を起こすのですが、個人の力は老化による能力の衰えや後継者の問題が生じて、結局大きな影響力を発揮できず、永くて、数十年間で終わってしまうものです。そこで考え出されたのが組織を作ることです。できた組織内の人事を更新すれば、常に活気ある状態が保たれます。そしてその組織に法人格を与えてもらえば、存在は社会的に永續するのです。

菌株保存活動も個人の力に頼るのでなく、組織を作って解決しようとして立ち上がったのが初代の長となった長谷川武治さんであります。長谷川さんはまず、いきなり国連に出かけていき、World Federation of Culture Collection (WFCC) をつくりました。帰国してただちにその下部組織として Japan Federation of Culture Collection (JFCC) をつくったのです。ここに菌株保存のための組織ができ上がりました。組織ができて活動をしていても、それが意味あるものとしてほかから認められなくては何にもなりません。つまり

認知されなければなりません。二代目の駒形和男さんは東南アジア 10 カ国から菌株保存機関で保存業務に携わっている 20～30 歳代の若い人を大阪、東京に招待して講義・実習を行いました。これにより、アジア各国の菌株保存組織と相互認知に成功しました。招待された人たちは若い人が多かったので未永い交流が保証されたのであります。このように存在は認知されても、常に学んでいなければ、問われても答えられないし、自ら発信もできないのでは存在していないのと同じこととなります。このことに立ち向かったのが、三代目の飯島貞二さんであります。ことあるごとに保存機関を集めて、菌株保存の問題とは何か、それをどのように解決するのかを論じ続けました。これだけでは論じ足りないので、先代から入会を認めるようにした個人会員を動員してシンポジウム、ポスター・セッション、研究会を重ねました。こうして新しい考え方や将来への工夫を提案できるようになりました。このように個人のレベルから団体のレベルに至るまで、いろんな角度から勉強を重ねました。その結果、とても活発な研究団体だと広く認められるようになり、参加者が増えました。それらの人々に応えられるようにとより大きな器が必要となり、日本微生物資源学会へと発展させたのが、四代目の山里一英さんであります。

このように菌株保存活動は適切な時期に適切な人が責任を果たして、順調に成長してきました。しかしここに至るのに 50 年を費やしたのであります。

## 3. 私が JFCC (日本微生物株保存連盟) から学んだもの

1981 年の 9 月、単身赴任からのがれるため財団法人発酵研究所に潜り込ませてもらいました。着任時、所長さんから「キューレーターとして働いてもらいたい」

Title : Golden Anniversary of Microbiological Culture Collections～The Progress and My Studying for the Fifty Years～

Taiki Kusaka

E-mail : qusaka @ palette. plala. or. jp

Fax : 06-6416-0737 (Japan)

といわれました。先輩から「あの所長さんは偉いよ。外国の保存機関なら所長がキューレーターさ。お前の責任は重いよ」といわれました。当時、私にはキューレーターの意味がわかりませんでした。しかし持たされた数千株もの菌株と闘う数カ月が経つと、①この数千株もの菌株数は多すぎるのか少なすぎるのか？②植継作業にだけ追われている毎日、これでいいのか？③私のところに来る分譲依頼は多いのか少ないのか？④リストには何を書くべきか？⑤なぜ世間では ATCC 株をほしがるとか？などなど、次から次へと疑問が湧いてきました。

2 年程経って、日本微生物株保存連盟の広報の手伝いをしてくれと頼まれましたので、1983 年の暑い頃、連盟の長に挨拶に参りました。「われわれは生きた博物館を守るのだ」といわれました。博物館とはもう使えない古い物が静かに置いてあってたまに人が訪れる場所で、生とか死とかは無関係、いや死ばかりの世界とっていました。わからないことがまた増えました。

広報のお手伝いとは機関誌作りでした。前任者より JFCC Newsletter を引受けました。その名のもとに 2 回発行 (1984) した後に誌名を Bulletin of JFCC (日本微生物株保存連盟会誌) と変え、背表紙に誌名が印刷できるくらいの厚さを目指して編集にとりかかりました。まず、会誌の目的を明確にしなければなりません。そうしないと誰も寄ってこないし、私もひとに助けを求められません。そこで、考えました。保存機関が共有する問題を解決するのが保存連盟である。本誌はその機関誌であるから保存機関の問題にはそこで働いている私の悩みも含まれるはずだ。私の悩みを誌上にぶっつけて、その答を書いてもらうよう執筆依頼をすればいいのだと気づきました。

上述の諸問題①植継作業の効率化、②保存による性質、機能の劣化、③適正な保存株数、④菌株番号と ATCC 株、⑤保存機関と博物館などにつきこれぞと思う人々に答を求めて執筆依頼をしました。また一方で

は①包装、輸送のことで郵政局へ、②病原性菌株の扱いで弁護士、医学者のところへ、③ワシントン条約で通産省へ、④植物病原菌のリスト作りで農水省へ、⑤新しい分類について分類学者のところへ出かけていき、得られた答を掲載しました。その他菌株利用者のため、新しいリストや諸外国のリストをできるだけ多く紹介しました。一方保存連盟は当然のこととして保存機関のみの会合をもち、そこで各機関がもつ悩みが述べられ、それらの解決への努力がなされていました。また当時は一般会員制度が発足したばかりでしたので、学会形式の発表やポスター・セッションそれにシンポジウムを催しました。菌株保存に関与する人、のみならず利用する人々も巻き込んで活発な意見を述べ合っていました。さらに UNESCO の援助を得て、東南アジア 10 カ国の菌株保存に携わる若い人々を呼び、大阪、東京で講義、実習を行いました。これらの間に、諸外国の菌株保存機関の責任者の訪問を受け、多くの質問を受けました。当然これらの出来事はまとめて会誌に掲載しました。このようにして 1985 年から 4 年間に会誌を通刊 9 号出しました。

この間の勉強により、

微生物は無数にあるが人の前に現れるのはごく少数で、かつ一度見失うとなかなか現れない。だから保存番号をつけて保存する必要がある。もしそれが死ぬとその菌株のもつ能力がこの地球から消失してしまう。だから生きた状態で保存され、かつ分譲されなければならない。これが「生きた博物館」である。その博物館になにが収納されているかを示すものがリストである。菌株の価値を見だし、それをリスト上に公開し、その菌株の価値を保証して分譲することに責任をもつのがキューレーターである。

このようなことを学び、確信するようになりました。

皆様は、何を学んで本日を迎えましたでしょうか？

2001 年 6 月 14 日